

2011年1月
今月の特選句

ひやかに売りつける技酉の市	前川敏夫
話術の極意は露天商の口上にあり。話術は無形文化財であるが後継者育成が気がかりである。なぬ？息子はオレオレ詐欺で技を磨いていると？	
円グラフ崩し風呂吹食ひにけり	種谷良二
大根の繊維が浮き出て、円グラフに見えたのですね。食べてしまうのは「モツタイナイ」ほど、と感じて句になったが、風呂吹は冷めて不味くなった。	
大根のラインダンスのごと干され	田村米生
ラインダンスは懐かしいね。あくまで大根であり大根足ではない。大根足ではラインダンスに不向きで、「大根足ラインダンスを解雇され」となる。	
愛しき手思ひつ切り打ち歌留多会	佐藤古城
「ごめんね」と、歌留多会の後で詫びたんだね。そして、それを「告白のきっかけ」にして…。おそらく、片思いのまま終わったのでしょね。	
駆け込みのデジタルテレビ冬に入る	稲沢進一
駆け込み購入の列は、難民の食料配布を思わせた。購入はしたが様々な機能の使い方が分からんから、「設置しただけで冬に入る」のだろうね。	
羽子板ににらみの利かぬ役者顔	奥脇弘久
毎年、時事ネタが羽子板の柄になる。経歴詐称して、先輩から睨まれたらしいね。人間国宝などと「羽子板のにらまれてゐる役者顔」。	

秀逸句
(・・・七七をつけてみました)

本音など聞かねば良かったおでん酒 ・・・曖昧こそが日本の伝統	川高郷之助
蓮根掘る事件の現場かと思れば ・・・将来的にはここで事件か	工藤泰子
来日を一声告げて初白鳥 ・・・お邪魔しますの悪声聞かす	黒田忠一
一切を有耶無耶にして事納 ・・・漁船衝突民主のイザコザ	可知豊親
蓮根掘地の下腹部をまさぐれり ・・・股間の所在不明のままに	金澤 健
風息の気まぐれアート落葉敷 ・・・芸術すべて自然にや勝てず	山下正純
潜ってもやがてみつかるおでんかな ・・・逮捕の日まで泳がせておく	有富洋二
此処だけの話が弾む冬日向 ・・・ナイショ話ノバカデカイ声	飯塚ひろし
河豚の白子たらふく食べて身籠らず ・・・ヒトの白子でなくてはダメか	ひがし愛
禁煙も三日で破る懐手 ・・・タバコとライター握りしめたる	白井道義
酒たばこ今日から止めて成人日 ・・・オトナの真似に飽きたのだろう	高田敏男
冬うらら出世街道からはづれ ・・・日向ぼこてふ極楽にある	小林英昭
献立に昆布を増やす木の葉髪 ・・・胡麻を増やせばゴマシオ頭	守屋八郎

今月の滑稽句

来たる鴨すぐに点検身ほとりを 秋冷や川鯉見せる己が腹 稲架あるを嬉しく思ふ時代かな	青山桂一 青山桂一 青山桂一
つねならんいろはもみぢのちりぬるを ちやんちやんこ問ふても応へなく寂し ももひきやかかつて牢屋に俳人が	秋月裕子 秋月裕子 秋月裕子
米入れてパンとなる十二月八日 年の瀬やおしやべり家電に指図され 樫や電波塔さへ代替わり	麻生やよひ 麻生やよひ 麻生やよひ
ユニクロで買初めしてるおばあちゃん 白黒をつけに行きます初詣 寝正月タイムスリップしてみたい	足立淑子 足立淑子 足立淑子
行き先に迷った拳句の寝正月 着膨れと云うてごまかすメタボ腹	有富洋二 有富洋二
点滴の雫は遅し暮早し 夕食のメニューにヒント社会鍋 化石園と落書のベンチに老集ふ	安藤淑子 安藤淑子 安藤淑子
触れ合へる脚が奇縁や炬燵船 聖樹の燈にはかに我はクリスチャン	飯塚ひろし 飯塚ひろし
極楽や婆さん呟く日向ぼこ 紅葉は出火と鎮火の繰り返し ふた竿の大根ぶら下げ留守の家	井口夏子 井口夏子 井口夏子
菊日和枯木に花の褒綬章 紅葉は愛でられ濡れ落ち掃き去られ 勤労感謝ごみ出しお茶汲み皿洗い	池田亮二 池田亮二 池田亮二
遠来の熟女に備え冬構 氷海のどこかに内定潜みたり 木枯しや夜中に道を掃く誠意	石川節子 石川節子 石川節子
節季候と鉢合わせする鉢叩 冬扇が当選をする県議選 若夫婦その翌日は布団干す	伊藤浩睦 伊藤浩睦 伊藤浩睦
病院で近頃はぬ風邪引いて 君は餅焼く人我は食べる人	稲沢進一 稲沢進一
焼酎や「焼き芋」と名をつけられて 早めらる投句のメ切月眺む 美人画の個展見終えて愁思かな	井野ひろみ 井野ひろみ 井野ひろみ
現役の枯葉マークの四トン車 欠に〇飲み放題の忘年会 説得は数字を入れてマスクして	宇井偉郎 宇井偉郎 宇井偉郎
サンタ帽被り店出るクリスマス 謎解かず師走のドラマ完となる 山頭火真似て吹かるる芒道	宇佐美徹郎 宇佐美徹郎 宇佐美徹郎
許されよ葷酒山門初詣 若水はペットボトルの天領水 初みくじ卒寿に初恋成就とは	氏家頼一 氏家頼一 氏家頼一
神の留守男はすぐに腕を組み 隙間風一枚羽織る生家かな	越前春生 越前春生
今鳴いた鳥いそいそ化粧する 紙幣匂ふ背広にむらがる夜の蝶 母美しく女あざとき樫紅葉	岡部一兆 岡部一兆 岡部一兆
温暖化忘れし聖夜煌めきぬ クリスマス諸人こぞりてケーキ買ふ	奥脇弘久 奥脇弘久
狒犬の洩らす欠伸や神の留守	笠 政人

招かざる秋の黄沙の尻拭ひ 桜切り詰めて小春の馬鹿となる	笠 政人 笠 政人
かぶ汁にあらすよここは聖護院 こつごもりはたこつごもり小晦日	可知豊親 可知豊親
防寒着着て胸を張り盲導犬 負ひし児の嘘や背なを驚かす 流星群開けたる口に飛び込めり	加藤澄子 加藤澄子 加藤澄子
トラウマの焼芋に手を出さざりし 鳶紅葉まんざらでなき松の幹 柿盗人熊が出るぞと抗弁す	加藤 賢 加藤 賢 加藤 賢
飾られてありふれた樹も聖樹かな 初夢を猫と違へて同じ床	金澤 健 金澤 健
紅葉狩三本足で参加する 小春日の医院サロンや老女達 冬晴の園ベビーカー車椅子	川島智子 川島智子 川島智子
いつしかに婦唱夫随となる歳暮 手袋を忘れしはあの厠かや	川高郷之助 川高郷之助
冬日和野良であるらし面構え 溪流の底にひそめる樞紅葉 たっぷりと黄金振り撒く大銀杏	北村マコ 北村マコ 北村マコ
「へ」の形「く」の字に群れて鳥渡る 黄落の美しきやがて邪魔となり 落ち葉には落ち葉の言い分掃く方も	久我正明 久我正明 久我正明
なにもかもすんなり運び衣被 蓮根掘る尖閣諸島ふと思ひ	工藤泰子 工藤泰子
喉ちんこ過ぎ鯛焼のしづまれり 不純なる動機で誘ふ村芝居 尾鱸つく噂つつぬけ隙間風	倉方 稔 倉方 稔 倉方 稔
熊飢えて少子化の世の子ら太る 余生とは死の未冠なり日記買ふ 初市の牛の尿りを浴びにけり	黒澤正行 黒澤正行 黒澤正行
Eカップの谷間を覗く紅葉峡 熱爛や体に血行良いもんだ	黒田忠一 黒田忠一
涙より鼻汁先くる八十路かな 自販機のお汁粉すする文化の日 銀杏の実拾ふOLランチ後	小杉 隆 小杉 隆 小杉 隆
社のためと身を粉にすれど捨案山子 着ぶくれて風呂めし寝るとしか言はぬ	小林英昭 小林英昭
爺いでも「新しいね」といわれたい 熱爛をイヤと言えない昭和人 加齢臭俺の中では佳麗臭	齋藤八兵衛 齋藤八兵衛 齋藤八兵衛
仏間にも聖樹ピカピカクリスマス ひとり者餅配待つ夕餉かな 奇抜さを競う若者成人祭	酒井鹿洋 酒井鹿洋 酒井鹿洋
病床の短日誰ももて余し 伊予さ行くノーベル賞やいよよ雪こ 鯨汁嫌ふ友あり許すべし	桜井宇久夫 桜井宇久夫 桜井宇久夫
草石蚕ほどのわが一物よ慨嘆す 烏骨鶏に唸る子猫の名は虎造	佐藤古城 佐藤古城
大泣きでサンタ逃げ出す発表会 月光り彼待つ家へ急ぎ足 不美人よ食して惚れるラフランス	佐藤義子 佐藤義子 佐藤義子
追い風になり向かい風になりからっ風 虎落笛ふえ吹きはなつ寒太郎 老の身を針穴に見る冬日和	澤田篤恵 澤田篤恵 澤田篤恵

疫病の狒狒に嘔まれて年を越し 悪代官人の財布で紅葉狩り よりつかぬ鳥の目立てや実南天	柴田真一 柴田真一 柴田真一
偉人でも奇人でもなく木の葉髪 番町と呼ばれし友の日向ぼこ 職探す吾子に注ぎやる熱き爛	清水吞舟 清水吞舟 清水吞舟
裸婦像の巨乳にひねもす文化の日 新婚の秘めごとを知る布団干す 皮被りひと皮剥くやクリスマス	壽命秀次 壽命秀次 壽命秀次
先生も人の親なり師走来る マスクしてアイコンタクト取りにけり	白井道義 白井道義
神様聞こえますか拍手は家内安全 うふうふう冬が好き 冬着地私と大根と深まる	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
テーブルは酒のつまみにおでんかな 霜晴れや歩道歩くと音がする 年の暮資料整理に追われます	鈴木哲也 鈴木哲也 鈴木哲也
金運の又遠のいて神の留守 整列す金柑頭文化の日	高田敏男 高田敏男
猟師居ず増え放題や猪の害 年詰まる携帯便器よく売れて 指揮者に禿頭は稀第九唄ふ	高田菲路 高田菲路 高田菲路
冬の蚊と二人っきりのエレベーター いただいたワインを抜いて冬ごもり 鍋料理争奪戦や冬座敷	高橋マキコ 高橋マキコ 高橋マキコ
村おこしラインダンスが大根干し 注目の綱にひときれ焼松茸 オバマッチャアイスに紳士服の群れ	高橋 都 高橋 都 高橋 都
セーター編む袖にするかと迷ひつつ もやい綱ちぎらむとして凧は 赤や黄の雨粒を乗せ落葉かな	高橋素子 高橋素子 高橋素子
おもちゃやでサンタにされるクリスマス それぞれに人それぞれの年の暮 着ぶくれのお好み焼きやそばを吹く	高松雄三 高松雄三 高松雄三
みみづくの猫でないとほほと鳴き 真白なる天狗も知らぬ花八つ手 夕日を持ち帰りたし冬の暮れ	田中章子 田中章子 田中章子
小春日や廟の太子の声を聴く 小春日の飛鳥や前世の記憶す 小春日や天皇陵で逆立ちす	田中 勇 田中 勇 田中 勇
医療費の人に劣らず年の暮 いじめっ子独楽の取り持つ仲直り 壮大な計画並ぶ初日記	谷むつみ 谷むつみ 谷むつみ
菜箸から逃げるおでんの玉子かな 单身のおでん辛子に涙ぐむ	種谷良二 種谷良二
暮早し早くおろせとアドバルーン 年賀状書くものでなく刷るものよ	田村米生 田村米生
掃けば又同じ所に濡れ落葉 適量の友より届く新酒かな 酔芙蓉朱に交りて垣を越え	飛田正勝 飛田正勝 飛田正勝
御雑煮を啣へのばすも壽 脱ぎ脱ぎて脱ぎ脱ぎ脱ぎて脱ぐ初湯 籟初の尺八またも躓きて	永島董玉 永島董玉 永島董玉
放屁にも力の要りて木の葉髪 鍋奉行これがあれだと鮫鱈鍋 参人に一人は人参嫌いかな	西をさむ 西をさむ 西をさむ

覆面の徒党の僧や煤払 なまはげの矢鱈とおどす泣く童 使い捨てカイロが大事冬支度	原田 嘩 原田 嘩 原田 嘩
大鞆サンタ取り出す頭陀袋 骨折り損よ雪掻きの骨折は	ひがし愛 ひがし愛
姫様の母はジーンズ七五三 浮く柚子の隣に一句浮かんでた 文庫本サイズでいいの文化の日	彦阪義久 彦阪義久 彦阪義久
曲線に味ある昔ラフランス 火を恋ふて火に追ひ出され竈猫 スピーカーで流れて来たる初神楽	久松久子 久松久子 久松久子
花といふよりも触覚花八手 冬紅葉発火寸前の赤 寒風に反抗をして冬萌ゆる	日根野聖子 日根野聖子 日根野聖子
文化の日村一軒が旗掲ぐ 隣家に考査に叱咤掘炬燵 賞与日や二合徳利と薄化粧	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
風呂吹き大根赤味噌で化粧して すき鍋の踊り上手の豆腐かな	藤原セツ子 藤原セツ子
猪に鳥の人口追い越され 無花果が裂けて葉陰で自己主張 寒風に身を晒け出す干し大根	古野セキエ 古野セキエ 古野セキエ
ワクチンを上回る知恵風の神 新婚にそよ風のごと隙間風	前川敏夫 前川敏夫
年の市切り売りしたき己が年 菊焚いてああきくきくと涙する 売り出しは超アドヴェントクリスマス	前 九疑 前 九疑 前 九疑
寒鯛の刺身定食五百円 寒卵二つ割っても妻に負け 肌寒や推敲せずに妻迎え	松尾軍治 松尾軍治 松尾軍治
幕引は義賊特みの秋の乱 秋風に軽き言の葉散りにけり 出来過ぎて引際成らず納め場所	丸山紘一 丸山紘一 丸山紘一
新酒酌み胃の腑発酵して来たる 敬老日今更生まれ変っても 一斉に落つ木の実てる感嘆符	三木蒼生 三木蒼生 三木蒼生
歳晩や脳のリセット幾度も 挨拶を目と目でしたるマスク顔 人気なき地下鉄ホーム風寒し	三塚不二 三塚不二 三塚不二
游禽の水輪見てゐる日向ぼこ 合戦の後で取り合ひいのこづち 子等帰へり庭履き片して良夜かな	三橋真砂子 三橋真砂子 三橋真砂子
縁側を譲られている干し布団 粧ひて観光船を迎へたる 取ってけと言わんばかりのみかん蔵	村上美和 村上美和 村上美和
六十はまだまだ娘青木の実 妻ありて猪口酒ありて蕪蒸し 冬の虹がんばらなくていいんだよ	百千草 百千草 百千草
上機嫌囀りまくる焼鳥屋 糖分の長期滞在冬太り 新型も一年もたぬインフルは	森岡香代子 森岡香代子 森岡香代子
国会はカン蹴りごっこで幕を引き 七草があっという間に南瓜かな 生欲の煩悩消すな除夜の鐘	森 要 森 要 森 要
お多福が持ててゐるなり酉の市 田畑の荒れて勤労感謝の日	守屋八郎 守屋八郎

Xは十字架のことクリスマス 噴煙の太れば桜島大根も 古い木を枯らしてしまひ木枯は	八木 健 八木 健 八木 健
力石持ち上げてをる霜柱 文化の日小豆揺らして波の音 長き夜のかくも短き詩を愛し	柳 紅生 柳 紅生 柳 紅生
焼蕎麦はレンジ七分超美味し わびしさや浮きた湯豆腐一人食ぶ 湯の街の一人よろしき雪見酒	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
富士ひとつ摘みあげたる真冬空 咳激し双子座星を落としけり 大カゼの残るしぶとさ根深汁	山内重昭 山内重昭 山内重昭
落葉敷ふたつと同じ道なかり 今の道のもうなかりけり落葉敷	山下正純 山下正純
十二月八日ごはんをお替りす 夫われをかあさんと呼ぶ小春かな 寸法を量られてゐる冬座敷	山本あかね 山本あかね 山本あかね
虎の子らうとうととして日向ぼこ 私のお誕生日のお茶の花 付みて来るなり紅葉の富士の山	山本けい子 山本けい子 山本けい子
カモメにも眉サンタモニカの冬の浜 上海で書く絨毯の送り状 ここも紅葉池上線の御嶽山	山本 賜 山本 賜 山本 賜
煤逃げのスリルや妻の後ろの目 煙突をせがまれている聖夜かな 火あぶりにされし如夏果てにけり	横山喜三郎 横山喜三郎 横山喜三郎
露天湯に猿ちゝこまる吹雪かな 赴の報せばかり殖えゆく齢かな デイケアの足がよるめくクリスマス	渡辺さだを 渡辺さだを 渡辺さだを
こながらの晩酌許せ初さんま 柿たわわ老僧円輪描きけり プラスバンドの稽古長びく秋最中	渡邊美代子 渡邊美代子 渡邊美代子